り、光次の従者二人を城中に送りこみ「後詰もない城を守ってお互に士卒を損ずるより、城を開け渡し東三河を家康に与えるなら、家康は信義の厚い武将だから、今川との友好を深めて行くであろう」と説いた。

小原肥前守も同意し、和睦の印にと人質を交換し、城を開け渡して駿河に帰った。徳川方から出した人質は、松平源三郎康俊（久松佐渡守定俊二男）と酒井左衛門尉忠次の娘お風とであった。

家康は、本多豊後守広高に田原城攻略を命じた。城主朝比奈肥後守元智は、広高の猛攻に堪え兼ねて和睦を乞い、城を開け渡して駿河に逃げ帰った。

かくて東三河も家康の支配下に入り、酒井左衛門尉忠次が吉田城主、本多豊後守広高が田原城主になった。家康の東三河平定は永禄七年六月二十二日と記されている。

注 ① 吉田 現 豊橋市

② 八幡 現 豊川市八幡町

③ 佐脇 現 愛知県御津町

④ 一宮 現 愛知県一宮町

⑤ 引間 現 浜松市

⑥ 伊奈 現 愛知県小坂井町

⑦ 田原 現 愛知県田原町

第六項 井伊谷三人衆概説

今川義元の戦死で、尾・三・遠の勢力地図が急激に変わりはじめた。松平元康は若かったが、既に頭角をあらわし、今川氏真と絶って織田信長と結び、永禄六年には家康と名乗り、一向一揆を平定し、永禄七年（一五六四）、早くも三河を手中に収め、鉾先を遠江に向けた。

「家忠日記増補追加」によると、永禄十一年三月七日、家康は堀川城（静岡県細江町）を攻めてこれを落とした。この戦いで、榊原小平太康政・松平勘四郎信一は先登して軍功を立て、大久保甚十郎・平井甚五郎・小林平太夫等は戦死した。

今川氏の衰退を見た信玄は、駿河攻略を目ざして兵を出した。家忠日記増補追加の原文を左に。

永禄十一年十二月六日、今川氏真カ家臣等、志ヲ武田信玄ニ通ス。是ニ依テ信玄駿州ヲ略セント欲シテ兵ヲ率、甲州ヲ発、大神君信玄ト大井川ヲ堺トシテ遠州ヲ領セント約ヲ成シ玉フ。

家康が、永禄十一年十二月六日酒井左衛門尉忠次に遠江の情勢をさぐらせると、本坂峠の麓に後藤覚藏実久・浜名の日比沢城主後藤佐渡守・都築の佐久城主浜名肥前守頼広、氣質の新田友作は引佐峠で忠次の侵入を防いだ。（徳川家康と其周囲）

そこで家康は、十二日に酒井忠次・菅沼定盈を道案内として、井伊谷城（静岡県引佐郡引佐町）に向かった。井伊谷城は今川の被官井伊信濃守直盛の居城であったが、直盛は桶狭間で討死したので、一族の肥後守直親が城主になっていた。直親も讒言にあつて横死したので、その子、万千代は三河に

逃れていた。

菅沼定盈は、先に「井伊谷城は要害の地に築かれているから、力責めにすると日数もかかるし兵力の損害も多い。某の一族、菅沼次郎右衛門忠久と、近藤石見守康用・鈴木三郎大夫重時の三人を味方にすれば、城は戦わずして手に入るであろう」と進言した。家康は定盈の意見を用い、井伊谷近くで三人に起證文（起請文）を与え、領地を宛がった。その起證文は、近藤縫殿助の系譜（千葉県市川市菅野 服部衣子氏藏）によれば次の通りである。

敬白起證文之事

今度両三人以馳走井伊谷筋ヲ遠州江可

打出之旨本望也就夫所々出置知行分之

事永無相違為不入扶助畢若從甲州

彼知行分如何様被申様候共進退引掛

候而見放間敷候也其外之儀不及申候

右之旨若於偽者

梵天帝釈四大天王別而者富士白山惣而

日本国中神祇之可蒙御罰者也仍如件

永禄十一年十二月十二日 家康

菅沼次郎右衛門殿

近藤石見守殿

鈴木三郎大夫殿

右の菅沼・近藤・鈴木の三士は武名高く、後に井伊氏に仕え、井伊谷三人衆と称せられるようになった。

家康が通った道筋について、菅沼家譜には「牛久保から加茂・中宇利を経て小幡（小畑）に着陣。

拓植山を越え、奥山を通って井伊谷へ出た。」とある。

拓植山とは、現在の鳳来町黄柳野にある遠州境の山、富幕山（五六三メートル）を指しており、道はこの山の北東の鞍部を通って奥山に通じる。この鞍部を陣座峠と言ひ、家康が通ったという伝説が残っている。気賀を避けて井伊谷へ通じる良い道筋で、峠は三河と遠州の国境にあり、西遠の山々を眼下に望むことが出来る。

井伊谷城へは、井伊谷の三士と菅沼定盈とが先登に進んだので、城兵は一戦もせず逃げ去った。

刑部の城は菅沼定盈一人で攻め取り、定盈の叔父菅沼又左衛門をこめておいた。（菅沼家譜）

十二月十八日、家康は引間（引馬）城を手中に収め、二十七日には懸川（掛川）城攻撃を始めた。

第七項 堀川城の戦い

家康は、懸川城の今川氏と和議成立のことがあって、一時岡崎へ帰った。その時、気賀一揆の残党が、気賀の南に川を要害として城を築き、堀川城と称し、家康の帰路を要撃しようとした。集まる男